

T-Cha

ニューズレター

vol.1



Rikutaro
Manabe

Masanori
Kishikawa

Yusuke
Nakamura

2年に一度、 神田祭で体験する 歴史と今 @神田明神

「ラブライブ！とのコラボも100年経てば歴史になります。庶民とも作り上げてきた神田祭は、昔も今も流行の文化を積極的に取り入れながら、時代に合わせて変化しているんです」

そう話すのは神田明神・権禰宜の岸川雅範さん。2017年、西暦奇数年にあたる今年、5月11日から17日までの7日間、2年に1度の神田祭が盛大に催されました。仮装行列や山車、曳き物が街を練り歩く「附け祭」には、キャラクターのお神輿も登場。近年ではアニメ作品とのコラボでも話題の神田明神ですが、時代の流行り物を取り入れることは、この祭にとっては昔から当たり前のことでした。江戸時代にもすでに、人気の歌舞伎役者と神田祭のコラボの錦絵、つまりプロマイドが販売されていたり、エンターテインメントであった能や人形浄瑠璃を取り入れたりするなど当時の流行を織り込んだものだったそうです。この「附け祭」は、江戸時代に行われていたものを2001年に復活させたもの。大衆文化を積極的に取り入れながら、



趣向を凝らして市民とともに作り上げる神田祭の姿が今も変わらず、ここにあるのです。



「神田祭ラボ」コンテンツ

そんな神田祭と東京文化資源会議のプロジェクトチーム「地図ファブ」(座長・小泉秀樹東京大学教授)が主体となり「神田祭ラボ」が発足。江戸・明治と現代の地図を自由に行き来しながら、神田祭の巡行路にまつわる歴史や食の情報をスマホ上で体験できるアプリ&ウェブ

「神田祭ぶらり」を開発しました。古地図と現代の地図上に「歴史からぶらり」と「食からぶらり」という2種類のピンを配置。「歴史からぶらり」では神田祭にまつわる歴史について、権瀬宜の岸川さん監修のもと様々な文献や資料の中から情報を整理して紹介しています。「食からぶらり」では江戸時代のレシピからインスピレーションを得たメニューや、江戸以来の伝統メニューを提供しているお店の情報を掲載しています。他にも神輿や山車などにライブカメラを取り付け、祭の生中継の配信を行うなど、神田祭の新しい楽しみ方を提案しました。「歴史は過去ではなく、今につながっているんです。今をより良く体験するために、歴史を学び、体験することが大事です。「食からぶらり」もただ昔のものに哀愁を漂わせるのではなく、料理の内容は現代向けにアレンジされています。今を生きてい

@Kanda Myojin Shrine

Rikutarō Manabe

Masanori Kishikawa

Yusuke Nakamura

るからこそ、それぞれの時代に合わせた変化していることを知ってもらいたいです」

「神田祭ラボ」コンテンツマネージャーで、東京大学大学院人文社会科学系研究科で文化資源学を研究する中村雄祐さんは、リアルな祭とアプリを組み合わせた街歩きによって、昔を振り返るだけではなく、過去から現代に脈々と続く文化の面白さを体験してもらいたい、と話します。スマートフォン登場により、位置情報を軸にライブ感を伴って街を体験できる時代になってきました。古地図や歴史の膨大な情報を分かりやすく楽しいものにする。「神田祭ラボ」では「神田祭ぶらり」をはじめ、地図を軸とした新たな祭の体験をデザインしています。



さんは、東京という都市の持つ文化資源の新たな可能性を地図で表現できないかと考え、東京北東部の文化資源を活用したモバイルアプリのコンテンツを企画しました。その企画提案がきっかけとなり、地図を活用する取り組みに興味をもった有志が集い、日々地図の可能性を模索するコミュニティ「地図ファブ」が生まれたのです。

東京文化資源会議では、この「地図ファブ」を組織的に支援しています。さらに東京文化資源会議が主体となり、千代田区・文京区・台東区の三区との「三区文化資源地図協議会」が2016年1月に発足。地図そのものを重要な文化資源と位置付け、産官学とともに多くの

は、大きく「アーカイブ」と「カタログ」の二つの活動に分かれます。アーカイブの活動では、公的団体が発行してきた様々な地図情報をデジタル化し、カタログの活動では、地図を活用した実験的な取り組みやアプリ開発などを行います。前述の中村雄祐さんと神田明神との縁がきっかけとなって始まった

「神田祭ラボ」は、まさに「アーカイブ×カタログ」の活動と言えます。地図上の位置情報サービスを提供する企業とのつながりも生まれ、「神田祭ぶらり」というひとつのサービスとして形になりました。東京文化資源会議においても、真鍋さんを中心とした「地図ファブ」のようなプロジェクトを積極的に支援しながら、東京にある文化資源の活用方法や提案を行うプラットフォームとして動き出しました。「神田祭ラボを含む「地図ファブ」プロジェクトでは、地図に関わる人たちが楽しみながら実験的な取り組みをしています。アプリ開発や古地図の活用など、これまでの文化資源の領域を超えた形で、かつ広く多くの人たちに楽しめるものを生み出せたと思っています」(真鍋)



エクトも始まっています。とりわけ注目したいのは、東京を舞台に博物館や神祕学などをもとに書かれた荒俣宏さんのSF小説『帝都物語』をテーマにしたプロジェクトで、小説の中で展開される出来事をリアルな地図上に落とし込んでいきます。「神田祭ラボ」を通じて見えてきた改善点をもとに、コンテンツとしての質を高め、かつ使う人にとって便利で楽しいものを念頭に置きながら、文化資源をどのように活用していくか。その根底には「地図」という文化資源をいかにして面白がれるかが最も大事な要素だと、真鍋さんは語ります。「地図ファブ」の次なるプロジェクトにご期待ください。

「地図ファブ」では次なるプロジェクト

web版はこちら

android版アプリダウンロードはこちら

iOS版アプリダウンロードはこちら

神田祭ぶらり



「地図ファブ」の活動が広がりました。

人たちを巻き込みながら、公的な地図のアーカイブやその成果物の活用方法を模索する動きが広がりました。

東京文化資源会議では、産官学民の様々な分野の専門家や実践者が集い、各地域で育まれている文化資源をハード・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。ここでは、東京文化資源会議全体の動向や各プロジェクトの近況をお知らせします。



谷中のまちの未来を考える プロジェクト@谷中

文化資源を活かしたまちづくりの人材養成プログラムを行う「プロジェクト@谷中」@谷中。坂と緑に恵まれ、寺町としても知られる谷中は、活発な地域コミュニティが育まれている一方、木造住宅密集地域や少子高齢化といった社会課題に直面しており、地元に住む家主らと連携しながら町の将来像を共有し、次世代に受け継ぐためのまちづくりが盛んな地域です。

今回のプロジェクトスクールでは、約3ヶ月の期間で3つの物件を中心に課題の洗い出しや企画立案などを行います。明治大学理工学部建築学科で都市計画、都市デザインの理論研究を行う小林正美さんやNPOたいとう歴史都市研究所の椎原晶子さんを中心に、谷中のまちづくりに携わる第一線の建築家や研究者とともに次なる文化資源を担う人材を育てていきます。

6月24日の開講式には40名超の受講生が集まり、谷中の現在の状況や、取り組み3つの物件の概要が講師陣から話されました。プログラムの鍵は、講義編と実践編の両軸で進むこと。近隣の方々へのヒアリングなどの実践を積み重ねながら提案を取りまとめていきます。最終報告会は10月1日。3ヶ月の熟考期間を経てどのようなアイデアが出てくるのか。楽しみです。

旅館街・本郷の記憶をたどる 本郷のキオクの未来

本郷地域の文化資源の記録、保全活動、リサーチ・提案などを行う「本郷のキオクの未来」活動メンバーである文京建築会ユースが「歓迎！本郷旅館街」をテーマに7月13日から16日まで文京シックセンター1階ギャラリーにて展示を行いました。かつて、本郷には100を超えた旅館が軒を連ねていました。



その先駆けとなったのが、明治37年創業の「朝陽館」。2016年、惜しまれながら閉館した朝陽館の建築模型や当時の写真雑誌の記事から、VR技術を使った閉館した旅館内を体験するコンテンツなど、あらゆる記録素材を展示しました。また、今でも当時の風情を保ち続ける現役旅館「鳳明館」を紹介。点在する旅館も残りわずかとなり、旅館街の面影が消えつつある本郷において、現在でも愛される鳳明館はとても貴重な存在です。現代ならではの旅館の楽しみ方を、老若男女、外国の方など様々な人たちに活用してもらおうための模索をしています。

東京文化資源会議の 第1回総会が 開催されました

6月30日、東京文化資源会議2017年度第1回総会が神田淡路町のワテラスコモンにて開催されました。総会では、2016年度活動実績報告及び決算報告、2017年度事業計画及び収支計画案を発表。1000人近い会員の参加のもと、盛会のうちに終了いたしました。

東京文化資源区構想のあり方も年々進化していき、東京北東部の地域半径3キロ圏内、生活文化資源や学術文化資源、出版文化資源など多様な文化資源を活用するプロジェクトがこれまでに10を超え、領域も分野も越えた専門家が集いながら、様々な活動が生まれる場となりました。

本年度から、各プロジェクトの推進のみならず、東京文化資源区構想及び東京文化資源会議の社会的認知を高めるため、ウェブサイトやSNS等によるインターネット上の情報発信、賛助会員及び関係者向けニュースレターの発行、東京文化資源会議区内の地域めぐり案内リーフレットのシリーズ化といった広報活動に力を入れるために、事務局内に広報委員会を設置しました。組織整備や関連機関との連携をもとに、2020東京ビエンナーレの開催や東京文化資源区文化プログラム推進協議会の設置、賛助会員との個別事業の取り組みなど、これまで以上に

に活動の幅を広げながら、皆さまとともに2030年に向けた東京の未来に向けて歩いていきたいと考えています。



上野スクエア構想

上野スクエア構想検討委員会（委員長：中島直人東京大学准教授）は、庶民文化の中心である上野の魅力発信するため、不忍池・上野広小路・湯島・アム横・御徒町一帯を対象に地域の豊かな文化資源が連携したエリアビジョンを検討しています。8月3日開催の第2回委員会では、東京大学大学院メンバーによるプロジェクト提案を素材に、委員や産官学のオブザーバーとともに議論を展開しました。今後さらに議論を重ね、年度末を以て構想をとりまとめ、次年度以降の実践へつなげてまいります。

リノベーション まちづくり研究会

8月2日、アーツ千代田333にて第1回研究会が開催されました。事務局含む12名とオブザーバー企業8社が出席しました。本研究会は、都心部の歴史文化資源を活用するために、まちづくりファンドなどの投融資の仕組みや容積率移転の手法を併用した新しい都市計画建築制度の提案が目的です。今回は容積率移転の議論を中心に、地域金融機関と連携したまちづくりファンドの情報共有。2年間を以て3ヶ月に一度の頻度で研究会を開催する予定です。

オリンピックの 文化発信拠点 「ナショナル・ハウス」 設置プロジェクト

2020年東京オリンピック開催時に、各国が自国を紹介する文化発信拠点となる「ナショナル・ハウス」のコーディネートを担う組織を設置しました。各国の政府ならびにオリンピック委員会が「ナショナル・ハウス」の土地や施設を探索する際の情報提供支援、オリンピック後の持続的活用に関する提案を行います。現在、地域で活動する実務家や各分野の専門家が集まり、コーディネート活動に取り組まっています。

プロジェクトスクール
@谷中

「ジッセン編 提案報告会」
2017年10月1日(日)

地域の若手実務家や学生による3チームが、谷中のまちの空間・活動を聞き、人をつなぐ「ジッセン」を提案。講師や地域住民も交え、まちでのプロジェクトの立ち上げ方や継続について議論します。観覧を希望する場合はプロジェクトスクール@谷中事務局 (ps-yanaka@tohun.sakura.ne.jp) までお問い合わせください。

地域文化資源
デジタルアーカイブ

「地域の記憶と記録を今に活かす
—地域文化資源
デジタルアーカイブの役割—」
2017年11月24日(金)

谷中・根津・千駄木地域を対象にした地域文化資源デジタルアーカイブ・プロジェクトの中間報告と今後の可能性を議論します。さらに、全国的な地域文化資源デジタルアーカイブのネットワークを形成するにあたっての問題点・課題を明らかにします。詳細はホームページ (<http://ida.tcha.jp/>) をご覧ください。

湯島神田社教会堂
検討会

フォーラム「日本の新しい
精神文化創造に向けて」
2017年10月17日(火)
「東京・水の記憶と
湯島社教会堂プロジェクト」
2017年11月14日(火)

湯島神田社教会堂検討会は、大学研究者や神田明神、ニコライ堂、湯島聖堂、湯島天満宮の各施設から委員が参加し、同じテーブルで議論する画期的なものとなりました。10・11月には、約1年間にわたる検討会の成果報告および議論を行うフォーラムと「水の思想」に関するシンポジウムを開催します。

東京文化資源会議

「各プロジェクトの今を総ざらい！
活動報告のタペ」
2017年11月27日(月)

一般会員と賛助会員のみなさん向けに、プロジェクトメンバーたちがプロジェクトのきっかけや想い、活動内容、成果についてプレゼンする会を開催します。会場はアーツ千代田3331のコミュニティスペース。報告会と懇親会の2部構成で、17時スタート予定です。詳細はMLやHPにてご案内いたします。

東京という街はとても多様で重層的な文化が眠っていて、それが歴史を築き、未来を拓く種となっています。各プロジェクトの方々と対話を通して、これからの東京の姿と可能性に期待と興奮を感じています。(江)

東京文化資源会議の活動が様々な展開してきている今、ニューズレターが創刊されました。タイトル、体裁、コンテンツなど全てを一から編集メンバーで考えて誕生しました。今後も文化資源会議の活動を伝えていきます。(陸)

大学、NPO、町内会をはじめ、東京文化資源区内では常時たくさんの方が活動を生み出しています。そんな活動の数々を、わらかく紹介し、季節に一度、皆様にお届けできたらと思っています。次号もお楽しみに。(雅)

この人はなんでこんなプロジェクトをやっているんだろう、と思って話を聞いていくと、びっくりするような話に出くわすことがあります。結果は大切なのですが、それより動機とかきっかけとか、人を突き動かすなにか、に興味があります。(なが)

編集後記



【ティーチャー】東京文化資源会議ニューズレター vol.1

渋み、旨み、甘み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会 デザイン：渋井史生(PANKEY inc.) 執筆：江口晋太郎(TOKYObeta Ltd.)

写真：加藤甫、江口晋太郎 印刷・製本：スターツ出版株式会社 発行人：東京文化資源会議 発行日：2017年9月30日

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-1 TEL：03-5244-5450 FAX：03-5244-5452 MAIL：info@tohun.jp URL：http://tohun.jp/

